



Los Angeles Office
New York Office

2720 Monterey Street, Suite 404, Torrance, CA 90503
330 Madison Avenue, 2nd Floor, New York, NY 10017

Tel: 310-218-1020
Tel: 212-922-9090

© Entire contents copyright 2015 by FRONTLINE INTERNATIONAL, INC. All rights reserved.

引越  **米国ヤマト運輸**
クロネコヤマト

フリーダイヤル
1-866-5-KIKOKU
お問合せは日本語でお気軽に!

各サービスの詳細は
ウェブサイトをご覧ください yamatoamerica.com

帰国後の住まいの準備
始めてみませんか? *



夏休みの一時帰国時が
チャンス!

帰省先の
近くで 「帰国後の住まい」の
ご相談をしませんか?

日本全国各地域290*を超える展示場で
お待ちしております! ※ 2015年2月現在

お子様が来年の4月からの
新学校入学のため日本に帰国!
今からなら間に合うかも!!

住宅ローン、
相続税対策
などを
アドバイス

日本に住む
ご家族と一緒に
打合せ

ご心配なご予算の
打合せなど

設計士とプランの
打合せができます

ご相談のご予約・お問い合わせは
「帰国後の住まい」ホームページまでお気軽にどうぞ!

* エリアによっては対応できない地域もございます。

詳細は
こちらを
クリック!

帰国後の住まい 検索
<http://sfc.jp/ie/kikoku/>

海外にいながら、住友林業の家づくりを丸ごと
WEB上で体験できます。ぜひご覧ください!

WEBサイト
続々更新中!

住友林業株式会社

USフロントラインは
ウェブでも
お楽しみいただけます

www.usfl.com



カメラで歩く 絶景のシカゴ

P-5

レジー・ライフ監督インタビュー
大リーグ・ホットドッグ王者決定

P-22

P-43

エルニーニョ現象が原因!? うにの老舗が悲鳴。

海水の温度上昇によりうにの餌となる海藻が育たずに、うにの量も減少、さらに強風の影響で漁ができない日が続くという異常気象によるダブルパンチでうにの老舗が悲鳴を上げている。お寿司やさんへの安定供給に影響がでているほどだ。芳醇な甘みの大粒LA特産うに、食べれるうちに事前予約をしよう。

お得な
ギフトセット
あります

日本語でお気軽にお問い合わせください。
www.maruhide.us Tel: (562) 435-6509
Email: sales@maruhide.us FAX: (562) 432-4692

うにクラブ (うに専門料理店)
Tel: 310-323-2864

日本全国クール便、米国内翌日宅配中!
www.maruhideshop.com

帰国したその日から **快適生活を
スタート
しませんか?**

アメリカまで日本の住まい情報を
毎月無料 でお届けします!

パナホーム 帰国 検索



“Live Your Dream”

「夢を生きる テイラー・アンダーソン物語」 レジー・ライフ監督に聞く

文／佐藤美玲



Q このドキュメンタリーを撮ろうと思ったきっかけは？

A 震災が起きたとき、私はワシントンDCのハワード大学で教えていました。同時に2010年に起きたハイチ大地震のドキュメンタリー「Reason To Hope: The Earthquake in Haiti」の制作も最終段階に入っていました。ある夜、家に帰ると、

妻がテレビのニュースを見ていました。DCでは地上波で日本のNHKをほぼリアルタイムで見られるのです。それで震災を知りました。

大学に行きながら日本の様子を気にかけていましたが、テイラーの名前を知ったのはインターネットでだったと思います。日本にいるアメリカ人の安否を心配するメッセージがネット上を駆けまわっていました。彼女の遺

体が見つかって、残念で悲しく思いましたが、同時に、これほど多くの人が心配しているテイラーって、一体どんな人だったんだろう、と思ったのです。

幸運なことに、私には、元JETで日本に行き、今は日米関係のさまざまな団体で役職に就いている友人が沢山いました。彼らを通じて、テイラーの父親、アンディーに伝言を頼みました。同じア

メリカ人として、日本に繋がりのある人間として、お悔やみを伝えたかったです。そして、いつか、テイラーの人生や残したものを記録したいと思うときがきたら、私も会話に加えてほしいと伝えてもらいました。

アンディーからEメールが届いたのが6月です。それからメールや電話を通じて、テイラーのエピソードや思い出を少しずつ聞くようになりました。

たまたま別の映画の仕事で秋に日本へ行くことになっていたので、東北へも行ってテイラーの友達や同僚に会いたいと思いました。アンディーに頼んで、紹介してもらいました。

新幹線で仙台まで行きましたが、電車は東仙台までしか通っていないので、テイラーの友達の一人が車で迎えにきてくれて、石巻まで行きました。高速道路を走っているときは分からなかったけれど、石巻に近づくと、どれだけ大きな津波だったのかを実感しました。市内の高台にある日和山公園で、テイラーのもう一人の友人にも会い、ドライブして被災地の様子を見せてもらいました。夜は、テイラーが毎月1回、JETの同僚たちを集めて会っていたというレストランに行つて、話を聞きました。

テイラーの家族と会ったのは、その年の11月です。サンクスギビングの翌日に、リッチモンドへ行きました。アンディー、母親のジーン、テイラーのきょうだい温かく迎えてくれて、サンクスギビングのレフトオーバーを食べながら、「映画をつくりましょう」ということになったのです。

テイラー・アンダーソン。バージニア州生まれ。小さな頃から、なぜか心を惹かれた日本。日本語を勉強し、日本へ行きたいという夢を叶えるため、JETプログラム（語学指導などを行う外国青年招致事業）に応募。宮城県石巻市に派遣され、子供たちに英語を教えながら、日本での生活を満喫していた。来日して2年半。アメリカへ戻るか日本に残るか、悩みながらも将来を思い描いていた矢先、東日本大震災が発生。万石浦小学校にいて子供たちを避難させた後、自転車に乗って自宅へ。それが最後に目撃された姿になった。

東日本大震災で犠牲になったアメリカ人、テイラーさん（当時24歳）の生涯を、家族や恋人、友人、JETの教師仲間や同僚たちの言葉で振り返るドキュメンタリー映画が、「Live Your Dream: The Taylor Anderson Story」（邦題「夢を生きる テイラー・アンダーソン物語」）だ。

キックスターターなどを通じて一般からの支援を得て、2012年に完成した。夢を追って精いっぱい生きてきたテイラーさんの姿は多くの人の共感を呼び、大震災から4年が過ぎた今も、日米両国の各地で上映が続いている。

監督兼プロデューサーは、日本とアメリカを拠点に、言葉や文化、人種の壁を乗り越えて夢に向かって生きる人たちの姿を撮り続ける、レジー・ライフさん。映画に込めた思いやメッセージを聞いた。

テイラーさん（当時24歳）の生涯を、家族や恋人、友人、JETの教師仲間や同僚たちの言葉で振り返るドキュメンタリー映画が、「Live Your Dream: The Taylor Anderson Story」（邦題「夢を生きる テイラー・アンダーソン物語」）だ。

またまた別の映画の仕事で秋に日本へ行くことになっていたので、東北へも行ってテイラーの友達や同僚に会いたいと思いました。アンディーに頼んで、紹介してもらいました。

新幹線で仙台まで行きましたが、電車は東仙台までしか通っていないので、テイラーの友達の一人が車で迎えにきてくれて、石巻まで行きました。高速道路を走っているときは分からなかったけれど、石巻に近づくと、どれだけ大きな津波だったのかを実感しました。市内の高台にある日和山公園で、テイラーのもう一人の友人にも会い、ドライブして被災地の様子を見せてもらいました。夜は、テイラーが毎月1回、JETの同僚たちを集めて会っていたというレストランに行つて、話を聞きました。

テイラーの家族や友人たちは、メディアに質問されることに飽き飽きし



レジー・ライフ監督

Photo by Hirota Aotsuka

レジー・ライフ (Reggie Life)

ヒットドラマ「The Cosby Show」「A Different World」などのディレクターを務める。1990年、全米芸術基金と日本の文化庁の sponsor によるプログラムで日本へ。山田洋次監督の「男はつらいよ第43作」や「息子」の現場で研修。ドキュメンタリー「Struggle and Success: The African American Experience in Japan」で高い評価を受ける。三部作となる「Doubles: Japan and America's Intercultural Children」「After America ...After Japan」を制作。最新作は、沖縄県人として初めて芥川賞を受賞した大城立裕の小説「カクテル・パーティー」の映画化。

作品情報

「Live Your Dream: The Taylor Anderson Story」

DVDを発売中（家庭用49.95ドル）。

■問い合わせ：LiveYourDream1@earthlink.net

■詳細：www.TheTaylorAndersonStory.com

www.GlobalFilmNetwork.net



Courtesy of Taylor Anderson



Courtesy of Taylor Anderson

ていました。「そんなテイラーじゃない」「テイラーは被害者なんかじゃない」と。

テイラーは、日本で、まさに夢を生きていました。だから、映画をつくるのなら、夢を生きている生き方、恐れることを知らない、妥協しないでフルに生きるということを描こう。そんなテイラーの生きざまを記録しよう。遺族と一緒にそう決めたのです。

非常に多くの人がテイラーのために何かしたいと思っていたので、制作の資金はキックスターターやクラウドファンディングで集めました。私にとっては初めての試みです。寄付の金額は1ドルの人も5000ドルの人もいましたが、みな平等に、映画のエンドロールでクレジットに入れました。

Q 友人たちが熱く、よく積極的な語っているのが印象的ですが？

A インタビューをした誰もが、テイラーの「死」ではなく、「生」について語りました。陽気で、いつもハッピーだったテイラー。毎日が冒険のように、日本をエッジイロイしていたテイラー。ニュースで流されたイメージとは違う、「本当のテイラー」について、皆が話したがついていけません。テイラーの生を祝うように話してくれました。それこそ、テイラーの性格と生き方がもたらした影響だと思います。夢がもつパワーは、否定することができない。そう思いました。

テイラーは、地震が起きたあと、何か特別な行動をとったわけではありませんでした。ほかの教師たちと一緒に子供たちを避難させた。必要なことをやっただけです。安全を確認したから、今度アメリカにいる自分の家族に電話をしようと思ったのでしよう。

テイラーはその日の朝、たまたま携帯電話を家に置き忘れていました。子供たちを親に引き渡して、自分の親が心配しているだろうと、自転車に乗ってアパートへ向かったのです。その3日前にも小さな地震があつて、石巻に津波がきていたそうです。でもたいしたことはなかった。それでテイラーも、ほかの人たちも、またその程度だろうと思つていたわけです。40メートルもの津波がくるなんて、誰も思つていませんでした。

Q レジーさんが日本に惹かれた過程は？

A これは自分の世代に共通しますが、ジュニアハイスクールの時代、最初に日本に抱いたイメージは、「メ

ード・イン・ジャパン」のオモチャでした。質が悪くてすぐ壊れる、というジョークがはやつていました。映画に興味をもつようになるのと、日本の古い白黒の映画にとっても惹かれました。放課後になると、仲が良かった友達と一緒に、いつか行きたい国は日本、と話して夢見ていました。

ロサンゼルスでテレビのディレクターをしていた1990年、文化庁の招きで初めて日本に行きました。ちょうど映画産業が衰退し始めた時期で、はじめは望んだ仕事ができませんでした。山田洋次監督の「寅さん」の制作現場を6カ月間、体験しました。

終わったあと、撮りたい映画は何かと聞かれて売り込んだ企画が、日本で生きているアフリカ系アメリカ人たちにインタビューしたドキュメンタリー「Struggle and Success: The African American Experience in Japan」です。

彼らもまた「被害者」と捉えられていましたが、むしろ反対で、アフリカ系であることをバネにして、母国アメリカでは「黒人だから」という理由だけで与えられなかった成功のチャンスをつかんでいました。

続編の「Doubles: Japan and America's



今年3月、ロサンゼルスで行われた、東日本大震災4周年のイベントで、

Q インターネットやテクノロジーのおかげで、バックグラウンドの異なる人たちと出会うことは、一見やさしくなっているように見えます。今の若者たち、テイラーさんやレジーさんがしたように、これから国境を越えようとしている人々への、メッセージは？

A テイラーと同じぐらいの年齢の人たち、そしてもっと若い人たちが、このドキュメンタリーを見て、刺激を受けてくれたらいいなと願っています。

テイラーの人生が何かを教えてくれるとしたら、それは、私たちがボーダーレスな社会に生きている、ということではないでしょうか。私はテイラーに会ったことはないけれど、彼女は、会う人すべてと親密な関係を築けた人でした。ルックスに関係なく、「ハロー、フレンド」と言えた。そういう人だったと思います。

若い人々には、旅をしてほしい。当然とわっているボーダーを、文化的・人種的・心理的なボーダーを、越境していつてほしいです。勇気をもって、怖がらないで。他人がどう思うかなんて気にしない。自分はこれをやるんだ、これが自分がやりたいことなんだ、と。

私は、日本によって助けられました。一度ひらいたものは、二度と閉じません。「君はアメリカ人なんだ」。さらにその中のカテゴリーとして「君はアフリカ系なんだ」と言えます。

と。「ここが君の場所なんだ」と社会が押しつけるものに抵抗して、「No, it's not my place」と言えるようになってきました。

最近の世の中を見ると、「分断の時代」に入ってしまったような気がして心配です。クリスチャンだ、ムスリムだ、ロシア人だ、ウクライナ人だ、と。大昔に戻ったように、「私のグループはこれ、あなたはアウトサイダーだ」という傾向があるようですが、とても危険で、非生産的なことです。若い人々には、そうした分断を疑問視して、壊していってほしいです。



テイラー・アンダーソン記念基金

「The Taylor Anderson Memorial Fund」

■詳細: www.TaylorAndersonMemorialFund.org

